

# 都市のジェントリフィケーションに 埋め込まれた壁画的メディアの考察

ーロサンゼルス市街地の事例をもとにー

江 成 幸

**要旨：**チカーノ壁画はメキシコ系アメリカ人の権利獲得運動のなかから発展し、芸術的評価を得るにいたっている。またパブリック・アートの壁画制作は、都市の環境改善策にも取り入れられてきた。学会出席のためにロサンゼルスを訪問する機会を得て、市街地におけるチカーノ壁画および「壁画的」な広告媒体の事例を収集し、都市の変容と情報化との関わりを考察する。

## 1. 目的

本稿では、米国カリフォルニア州のロサンゼルス市街地に点在する壁画、および壁画に類似した視覚メディアについて考察する。本稿で取り上げる対象を「壁画的」と判断する準拠枠は、現代都市におけるパブリック・アートとしての「壁画」(mural)である。カリフォルニア州は、メキシコ系アメリカ人たちが自らをチカーノ (Chicano) と呼称し権利運動を行なった歴史があり、白人社会によって抑圧された文化を復興するために 1960 年代末から壁画制作が盛んになった (加藤 2002: 242)。エスニック・マイノリティによる芸術活動を代表する壁画が、ロサンゼルス中心部で現在進行するジェントリフィケーションやデジタル時代の情報伝達とどのように結びついているかを明らかにしたい。

ジェントリフィケーションとは、アメリカの大都市が 1980 年代にかけて衰退したのちに、住民の貧困や犯罪多発などのインナーシティ問題から脱するため、計画的に再開発を行い、資本投資と富裕層を呼び込むプロセスである。新たに流入する住民はおもに白人であり、古い居住区の建て替えや家賃の高騰により、それまで住んでいた中間層以下の非白人は立ち退かざるをえなくなる (Saito 2022, 高橋・園部 1988, 矢作 2019)。

筆者は以前、アメリカ合衆国東部のフィラデルフィアにおける壁画制作をとりあげ、都市再生の一環として紹介した。パブリック・アートの壁画制作は、都市問題解決のための公共政策と少なからぬ関わりがある。壁画づくりに地域の若者が参加したり、情景を彩ることで近隣の荒廃をくい止め、住民の孤立を防ぐことにつながっている (江成 2018)。1980 年代半ばに始まったフィラデルフィアの取り組みには、ロサンゼルス市街地の非営利団体が行っていた壁画制作のノウハウが移入されたという (安井 2008: 21-22)。筆者は 2022 年 8 月にアメリカ社会学会 (American Sociological Association, ASA) の年次大会に参加するためロサンゼルス市を訪れる機会を得て、本家ともいえる都市で壁画を実際に見たいと考えた。

以下ではまず、壁画および「壁画的」な視覚メディアを社会学の対象として論じる学術的背景について述べる。次に、事例の収集方法と分類について説明したうえで、具体例を挙げて検討する。

## 2. 学術的背景

社会学のおもな関心は、社会集団の把握を通じて人間の行為や意識を分析することである。しかし1990年代以降、直接ヒトばかりに注目するのではなく、人間の活動に深く関わる物理的環境やイメージも重要な対象だとみなされるようになった。ジョン・アーリは、グローバル化の進展やポストモダンの思想をふまえた著書『社会を越える社会学』（2000＝2006）のなかで、「社会関係は、機械、テクノロジー、モノ、テキスト、イメージ、物理的環境などを通して形成され、再形成されている」という立場を示した（Urry 2000＝2006: 24）。人間をモノから独立した行為主体とみなすことをアーリは批判し、社会学は「非人間的なハイブリッド」を対象にすべきだと述べている（Urry 2000＝2006: 25）。そして、「むしろ、物理的世界と人工品が、人間によってどのように感覚的に経験されるのか」が重要なのだと主張する（Urry 2000＝2006: 26）。特に西洋文化の科学的認識や視覚メディアの発達などが示すように、人間とモノとの関係性には、視覚が大きな役割を果たしてきたという（Urry 2000＝2006: 141-148）。

「チカーノ・アート」の全体像を研究した加藤薫によれば、1960年代末から盛んになった美術作家たちの活動は、メキシコ系アメリカ人が白人支配に対抗し、権利獲得と主体性を回復するという「チカーノたちの魂の叫びを表現し、メッセージを同胞に伝え、歴史の記録として残していく」ことに最初の目的があった。なかでも壁画は、ポスター、版画、グラフィティとともに、作品の受け手であるチカーノ住民とコミュニケーションを取る表現メディアとして多用された（加藤 2002: 34-35）。以上に照らすと、アメリカ西海岸の壁画は、観賞用の独立したモノではなく、人間の活動との「ハイブリッド」の特徴を備えていると考えられる。

チカーノ壁画の魅力と変遷については、日本の他の研究者も論じているが、時代とともに表現上の政治色が薄まり、芸術作品として評価されるようになったという認識で一致している（黒田 1998; 牛島 2001）。なお近年のアメリカ社会では、チカーノよりも、ヒスパニック系を総称するラティーノ（Latino/Latina/Latinx）のほうが多用されるようだ。だが、日本の先行研究にラティーノ壁画と呼ぶ例がみられないため、ひとまず保留する。半世紀以上にわたりロサンゼルス（Los Angeles）の景観に埋め込まれてきた壁画は、路上で視覚と想像力を刺激し、多様な人種・エスニシティの歴史や文化を都市のコミュニティで共有する媒体といえるのではないだろうか。

## 3. 事例の収集方法

アメリカ社会学会（ASA）の大会期間中には複数の視察ツアーが企画され、筆者はそのうちの2コースに参加した。ツアーは10名程度のグループで、地元の大学の研究者がリーダーとなって計画し、徒歩による解説付きで行われた。つまり以下にあげる例は、旅行者としての市内移動、および社会的学関心にもとづく団体行動で安全な経路をたどって見聞きした範囲である。

本稿ではおもに、筆者の視覚を通じて取り入れた一次情報をもとに考察する。ロサンゼルス滞在中に注目した対象を写真撮影し、日本に帰国してから画像と撮影地点を見直すとともに、その対象の来歴についてインターネット記事などを参考にした。

現代美術作家の大山エンリコイサムは、1970年代初頭からニューヨークで発展した「ライティング」、すなわち一般的にグラフィティと呼ばれるストリート文化を論じるにあたって、

都市のなかを移動する人がライティングに遭遇し「目撃」(sighting)することが、見る側の想像力を発動させると述べている(大山, 2020, 65-66)。ストリート文化を対象にしたフィールドワークは、仮説の検証のための観察ではなく、「街歩き」を通して「都市を再発見し再知覚する営みである」という(大山, 2020, 210-211)。

ライティングは、監視の目をくぐりながら、人目に触れる場所に独創的な文字を書き残すサブカルチャーから始まったもので、壁画とは異なる点もある。しかし、その作品を通りざまに目にする人々の想像力にはたらくことにおいては、共通すると思われる。なおパブリック・アートの壁画は、各種の行政手続きを経て共同作業で制作されるものである(加藤, 2007, 243-244)。またロサンゼルス市は屋外広告に規制をかけているため、特定のエリアで許可を受けて設置されている。したがって、建造物や交通インフラへの落書きのようなゲリラ的な表現は、ここでは対象としない。

今回のロサンゼルス滞在では、もっぱら視覚を働かせたフィールドワークにより、パブリック・アートの作品例と、商業広告に流用されている例を収集することができた。それら具体例をもとに、壁画的な表現が都市の再開発やインターネット情報とも関連し合うメディアとなっている現状を報告する。

## 4. 事例分析

### (1) パブリック・アートの典型的作品

わずかな滞在期間に遭遇したなかで、パブリック・アートの典型と思われる壁画は、パーシング・スクエア(Pershing Square)という公園に面した高層アパートに描かれたものである。ひとりで街を散策していたところ、ビルの合間に壁画を見つけ、公園内から撮影した(写真1)。下のほうに先住民の少女の顔が大きく描かれ、その頭上に女性の姿をした3人の天使が舞っている。作品解説のため、非営利報道メディア「ラティーノ USA」が2017年秋に制作現場を取材した記事を以下に要約する。

壁画作家ロバート・バルガスにより、《アンジェラス》(*Angelus*, 英語で「お告げの祈り」の意味)と題して制作されている。幼い少女の顔は、この地域にかつて住んでいたトングバ先住民をたたえるためである。天使はロサンゼルス市有彩色人種の人々を代表して、メキシコ系、アフリカ系、日系のイメージを反映したものである。バルガスは、移民が多く暮らすロサンゼルス郊外のボイル・ハイツ(Boyle Heights)で育った。自身が先住民とメキシコ系の子孫であることを作品に反映したという。壁にグリッド線を引いて下絵を転写するのではなく、直接ブラシで色を塗り重ねる技法を用いている(Cervantes, 2017)。

チカーノ壁画では、メキシコ系アメリカ人のルーツである古代文明や歴史上の人物はもとより、公民権運動の黒人指導者など他のマイノリティとの連帯をモチーフに取り入れている(加藤 2007: 130-131)。アメリカ先住民による抵抗運動とも1970年代に連帯し、「西欧人の侵入以前から先に住んで」いることと、「その遺産を現代にまで伝えてきている」という共通性を見出し、「ネオ・インディヘニスモ」(新インディオ主義)の思想および表現に結実した(加藤 2007: 155-157)。バルガスの作画は、オーソドックスにその流れをふまえたものかといえよう。なお余談になるが、ロサンゼルスでの大会開催にあたり、アメリカ社会学会は先住民トングバへの敬意と、先住民と連帯する立場を表明している。

さらに写真1の壁画には、中層階の向かって右側に、バスケットボール選手の姿がある。前出の解説記事に言及がないため、不思議に思い調べたところ、同じ画家が2022年に元NBAの故コービー・ブライアント選手を新たに描き加えたことがわかった（Wesler 2022）。地元チームのロサンゼルス・レイカーズで活躍し、ヘリコプター墜落事故により2020年に死去したブライアント氏を悼み、南カリフォルニアでは多数の壁画が発表されているそうだ（Kobemural.com）。

通りに囲まれたパーキング・スクエアに立ち寄ったのは週末の昼すぎだった。公園内には2、3人しかおらず、公衆トイレの屋根のひさし部分には、わざと目立つような大型の監視カメラが設置されている。観光客がつめかける美術館の通りから歩き始め、壁画を見上げる広場まで、坂道を数ブロック下っていくと歩行者はまばらになり、治安のよくないエリアに近づいたようだった。観光客である筆者は、広場のすぐ向こう側にそびえる壁画に引きつけられ、その先に視線を送ることなく引き返した。壁画はジェントリフィケーションの及ぶ境界あたりに位置しており、行き止まりの合図のように働いたのだった。



写真1 Robert Valgus 作 *Angelus* (2022年8月筆者撮影)



## (2) チカーノ壁画とデジタル媒体の脱分化

学会ツアーのひとつ「ラテン系ロサンゼルスを中心地——ボイルハイツ」(The Heart of Latinx LA: Boyle Heights)では、イースト LA に位置するボイルハイツ地区を訪れた。現在はメキシコ系を中心とする移民が多く暮らす住宅地で、表通りには商店街がある。歴史的にはユダヤ人や日系人も居住している。

NPO が運営する美術センター (Self-Help and Graphics) では、版画の個展のほか、市民による造形作品も展示されていた。施設の中庭にかざられた壁画は、アステカの太陽神、とうもろこし、マリアッチ音楽など、メキシコの伝統的な要素をマスコット・キャラクターのようにかわいらしく描いたものだった。「生粋の」チカーノ美術にとらわれず、グローバルなゲーム文化を取り込んで、子どもが遊ぶロールプレイングゲームの画面に変換したような印象を受けた。エスニック・マイノリティが手作業で創造してきた壁画も、デジタルによる表現と脱分化することで、若い世代へ継承しやすくなるのかもしれない。

個人商店が並ぶ十字路では、鮮やかな配色の大きな壁画が目をつけた (写真 2)。絵の中央にスペイン語で《私たちはボイルハイツです》(*Somos Boyle Heights*) というキャッチフレーズと、QR コードを配している。コミュニティ新聞「ボイルハイツ・ビート」によると、カリフォルニア州に本社があるフードデリバリー会社 DoorDash が出資し、地元出身の壁画作家たちが制作したということだ。QR コードのリンク先ホームページはすでに閉じているが、ボイルハイツの住民を取材した短編動画をインターネットに公開していた。

スポンサー企業名は動画のホームページに掲載されるだけで、間接的ではあるが、認知度向上と地域貢献の目的をかねた広報戦略だと思われる (Olmos 2021)。アーリは、視覚的に流布されるメディア・イベントでは、発信者が「みなさん」「われら」「ここ」などの直示的な言葉を付随することによって、受け手のナショナルな帰属、あるいは、国を越えた広域の一体感を想像させると指摘した (Urry 2000 = 2006: 319)。壁画に記された「私たちはボイルハイツです」というキャッチコピーにも、そうした意図が感じられる。

「わたしたち」は第一に、地域コミュニティとの提携を示しており、デリバリー事業にとってラテンアメリカ系の飲食店や住民らは新規顧客となりうる。第二に壁画は、ロサンゼルスビジュアル・イメージとして観光にも貢献しており、人種を越えてカリフォルニア州の人々になじみがある。つまり「われわれ」は、より広い消費者にも共有されうるメッセージだと考えられる。企業側は、この壁画のもつ話題性や、潜在的な顧客のデジタル・リテラシーを見越して、隠れたスポンサーになることを選んだのではないだろうか。筆者のように知らずに通りかかる人々は、純粋にチカーノ壁画として受け取ることだろう。

平日の昼間に訪れたこともあり、住宅地も商店街も閑散とした印象だった。歩行者は少なく、駅前のマリアッチ広場でソンプレロをかぶった白いワイシャツ姿の男性にすれ違い、住宅地では高齢者が介助者に車椅子を押されて通りかかる程度であった。メキシコの文化と昔懐かしい雰囲気はただようボイルハイツだが、ロサンゼルス中心部に近いため、実はジェントリフィケーションの波が押し寄せているそう (Saito, 2022: 17)。ツアーで利用したメトロレールという都市交通の整備も、都心への通勤通学の手段として住民構成に変化をもたらしているという (Saito, 2022: 171)。



写真2 Kalli Arte 作 *Somos Boyle Heights* (2022年8月筆者撮影)

### (3) 広告媒体としての流行

アメリカ社会学会の大会は、ロサンゼルス市中心部（Downtown）のLA ライブ地区の一角にある会議場（Los Angeles Convention Center）で行われた。周辺は再開発により複数の大型ビルが建設中であった。LA ライブは、プロスポーツ、コンサートなどの大規模イベント施設、国際会議場、高級ホテル、レストランなどで構成されている。数年前までその近辺には駐車場が広がっていたが、現在はシンガポールなどの外国資本によって、高層ビル群へと変貌しつつあるということだ。香港から学会に参加していた大学院生に尋ねたところ、LA の建設現場の写真をもし香港の友人に見せたら、香港の景色だと答えるだろうと話していた。

会議場のエントランス向かいの低層ビルの壁面には、スポーツ競技場や高層ホテルが隣接しているからであろう、スポーツ用品メーカーのデジタル動画広告が据えられていた。周辺にも、さらに巨大な LED パネルが宣伝を展開している。常時歩行者が行き交っているわけではないため、おもな目的は最新技術の話題性かもしれない。ロサンゼルス市の政策レポートによると、屋外広告は2002年以降厳しく規制されているが、会議場周辺は広告設置が特別に認められている地区である（City Planning Commission 2021: 1）。

それよりも筆者の目を引いたのは、デジタル広告にほど近い幹線道路沿いの壁面広告であった（写真3）。比較的高層の古いビルに、ポップな画風の少女の立ち姿と黒猫が描かれている。壁全体にペイントを施している特徴から、遠目には「本物の壁画」に思えたが、実際には「Apple TV+」が配信するアニメーション映画の広告であった。夜は巨大 LED パネルが勝るだろうが、南カリフォルニアの明るい日差しのもとで、昼間は壁面のペイントのほうが宣伝効果が高いように思えた。

ここで述べた例は、チカーノ壁画を見たいという筆者の願望による、一時の思い込みである。しかし、ロサンゼルス市の看板規制に沿った「目立つ広告」を「壁画的メディア」とみなすこ

とは、それほど的外れでもないだろう。ASA 大会では「ロサンゼルスダウンタウン南西地区におけるジェントリフィケーション」(Gentrification in Southwest Downtown Los Angeles) という視察ツアーにも参加し、旧市街地の歴史ある市場を改修したグランド・セントラル・マーケット (Grand Central Market) という観光スポットにさしかかった。その建物の側面には、高級ブランドのエルメスが広告を出していた。外壁に直接塗り重ねたようなタッチで、褐色の肌の女性モデルの全身像が描かれている。その技法や構図は、どこかチカーノ壁画に類似していると感じた。解説役の W.ニコールズ教授に感想を伝えたところ、「流用だ」(“Appropriation.”) と、やや批判的な口調のコメントが返ってきた。つまり壁画に見えないことはない。ただし、エスニック・マイノリティが主体となって歴史・文化を伝達ようとしてきた本質が抜け落ちているということだろう。



写真3 映画 Luck (ラック〜幸運を探す旅〜) の広告 (2022 年 8 月筆者撮影)

## 5. まとめ

ロサンゼルス市街で見られる壁画的な視覚メディアは、ストリートを移動する人々に向けて存在感を示している。都市建築の外壁を利用した視覚的表現として、チカーノの芸術活動、壁画的な商業広告、デジタル広告の3種類が並存している。今のところは、行政が看板設置を規制しているため、どれかひとつが他のメディアを圧倒して過剰に氾濫することはない。ただ仮に、デジタル広告が緩和されれば、壁画の存在感が後退し、街に刻印されたチカーノ文化が薄められる可能性もある。

限られた事例からではあるが、現在のチカーノ壁画は、デジタル媒体との脱分化や商業的な流用にさらされながらも、公共性の高いメディアとして都市のなかで認知されていると言えるだろう。エスニック・コミュニティのみならず、ロサンゼルス中心部における歴史のおよび文

化的なアイデンティティを形づくる重要な役割を果たしていると考えられる。

## 謝 辞

第117回アメリカ社会学会年次大会（開催地ロサンゼルス）で筆者が参加した視察ツアーの企画、引率、解説に尽力されたリーランド・サイトウ教授（南カリフォルニア大学）、ウォルター・ニコールズ教授（カリフォルニア大学アーバイン校）、大学院生ロア・マーティン氏（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）に感謝いたします。また滞在中に情報提供して下さった奥西陽子さん（カリフォルニア州立大学ドミンゲスヒルズ校図書館）、池上直美さん、および拙稿にご助言いただいた立教大学の小泉元宏准教授にお礼申し上げます。

## 付 記

平成30年度～令和5年度、日本学術振興会科学研究費助成事業-科研費-学術研究助成基金助成金、基盤研究（C）、研究課題番号18K02413「三重県で増加する外国につながる高校生の進路形成の課題抽出と解決に向けた重点支援」（研究代表者・江成 幸）の研究動向調査のため2022年8月4日から8月11日までアメリカ合衆国に渡航した。

## 参考文献

- Cervantes, Cora, 2017, “Muralist Robert Vargas Paints Indigenous Representation into Los Angeles’ Skyline,” *Latino USA*, November 28, 2017, (Retrieved October 28, 2022, <https://www.latinousa.org/2017/11/28/muralist-robert-vargas-paints-indigenous-representation-los-angeles-skyline/>).
- City Planning Commission, 2021, “Department of City Planning Recommendation Report,” Case Number CPC-2015-3059-CA, February 25, 2021 (Retrieved October 27, 2022, <https://planning.lacity.org/odocument/71af338c-a35a-4a06-87b5-debc85bb80c9/CPC-2015-3059.pdf>).
- 江成幸, 2018, 「北米の都市再生における壁画制作の社会的意義——フィラデルフィアのパブリック・アートに関する考察」『人文論叢』三重大学人文学部文化学科, 35: 65-69.
- 加藤薫, 2002, 『21世紀のアメリカ美術 チカーノ・アート——抹消された〈魂〉の復活』明石書店.
- Kobemural.com, 2022, “Kobe & Gianna Bryant Mural Locations,” (Retrieved November 5, 2022, <https://www.kobemural.com>).
- 黒田悦子, 1998, 「チカーノ壁画から美術館のための『移動壁画』へ——メキシコ系アメリカ人の抵抗の表現（素描）」『国立民族学博物館研究報告』23(1): 1-34.
- Olmos, Samantha, 2021, “Marketing and Community Pride Combine in ‘Somos Boyle Heights’,” *Boyle Heights Beat*, August 10, 2021, (Retrieved October 26, 2022, <https://boyleheightsbeat.com/marketing-and-community-pride-combine-in-somos-boyle-heights/>).
- 大山エンリコイサム, 2020, 『ストリートの美術——トゥオンブリからバンクシーまで』講談社.
- Saito, Leland T., 2022, *Building Downtown Los Angeles: The Politics of Race and Place in Urban America*, Stanford: Stanford California.
- 高橋勇悦・園部雅久, 1988, 「インナーシティ問題の構造分析」『総合都市研究』34: 5-17.



- Urry, John, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for Twenty-first Century*, Abingdon: Routledge. (吉原直樹監訳, 2006, 『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)
- 牛島万, 2001, 「チカノアートの歴史——対抗文化からの脱構築」『国際文化研究所紀要』城西大学国際文化研究所, 7: 15-37.
- Wesler, Ariel, “For Muralist Robert Vargas, the City Is His Canvas,” *Spectrum News 1*, February 4, 2022, (Retrieved November 5, 2022, <https://spectrumnews1.com/ca/la-west/inside-the-issues/2022/02/04/intersection-named-to-honor-local-muralist-and-his-work>).
- 矢作弘, 2019, 「『創造都市』が生む未曾有の社会格差——アマゾンのニューヨーク進出騒動から読む」『世界』919: 190-198.
- 安井倫子, 2018, 「1980年代アメリカ都市コミュニティ再生の試み——フィラデルフィア・ミューラル・アーツ・プログラム」『パブリック・ヒストリー』大阪大学西洋史学会, 15: 19-29.